F2-51

多様な地域的価値を育む海岸防災施設のあり方に関する研究
～（その１）「命山」造成の背景と空間的特徴について～

A Study on the Coastal Disaster Prevention Facility that Develops on Various Regional Values
～(Part2) A traditional background of "INOCHIYAMA" creations and spatial characteristics～

○田部望実[1]，齋藤陽介[1]，横内憲久[2]，岡田智秀[2]，鴨諸一[3]
*Nozomi Tabe, Yosuke Saito [1], Norihisa Yokouchi[2], Tomohide Okada [2], Shoichi Kamo[3]

Abstract: This paper is to grasp spatial characteristics through the maps and some bibliographic surveys for "INOCHIYAMA" process of creations. As a result, this research clarified that "INOCHIYAMA" exist two places in Asaba district of Fukuroi City, Shizuoka Prefecture. Local residents made two places for save themselves from Tsunami, flood tide and river flooding.

1. はじめに—2011(平成23)年に起きた東日本大震災以降，東北地方沿岸の被災地域はもとよりわが国の沿岸各地で海岸防災の見直しが進められている．この点より，静岡県袋井市に現存する「命山」と呼ばれる海岸防災施設は，高潮・津波来襲時は高台避難場所として機能し，平時は公園的利用と緑の景観形成を満たしている．こうした防災と日常利用の二面性を有する海岸防災施設は，避難場所としての気憶を日常利用を通して住民意識に内在化できる地域共有の財産となろう．

そこで本研究は，この「命山」の普及という観点に立ち，地元住民と海岸防災施設との関わりを通してみた，「命山」の造成に関する特徴と地域的価値について考究することを目的とし，本稿では「命山」造成の歴史的背景および空間的特徴について明らかにする．

２．研究方法—本稿では，静岡県袋井市浅羽地区において江戸時代から存在する「大野命山」「中新田命山」の２つの命山を中心に，表１に示す調査を実施した．

３．結果および考察–表１の文献調査の結果をもとに，「命山」やその他の海岸防災施設（浅羽大囲堤，中畦堤等）の位置を示したものが図１である．以降では，これらと分析資料[1]~[6]を通してみた，浅羽地区の海岸防災施設の歴史的特徴について述べていく．

（１）浅羽地区の初期の海岸防災施設—浅羽地区には中畦堤と呼ばれる河川洪水・高潮の水除け堤が中世より存在しており（ヒアリングより 13 世紀頃），これは浅羽 33 ヶ村を上輪と下輪に分ける堤であった[1][2][3]．

表１　調査概要

調査方法	文献調査	現地調査	ヒアリング調査
日時	2014（平成 26）年 ８月６日（水）～ 13 日（水）	2014（平成 26）年 ８月 31 日（日） ９:00～15:00	2014（平成 26）年９月８日（月） 10:40～14:10
場所	国立国会図書館	静岡県袋井市内	静岡県袋井市役所浅羽支所
調査内容	浅羽町の海岸防災施設に関する資料調査［1］～［6］	命山を利用した避難訓練の実態調査	命山に関する歴史的事項 命山の維持・管理形態の実態　等
調査対象	命山 浅羽大囲堤 中畦堤　等	湊命山 （平成 25 年 12 月竣工）	袋井市歴史文化館館長　白澤崇氏 袋井市総務部防災課　清水修二氏 元公立高等学校教員　浅岡義郎氏

（２）浅羽大囲堤の造成とツキヤマの出現—江戸時代の 1604（慶長９）年，太田川，前川等の河川洪水や遠州灘の高潮から浅羽地区等を防御するために，伊奈忠次が太田川流域の流路の変更を行い，さらに横須賀城主・本多利長の命により，全長約 13km に及ぶ浅羽大囲堤を築いた．この結果，江戸時代における浅羽地区は中畦堤と浅羽大囲堤の２つの堤によって高潮災害や河川洪水から難を逃れていた[2]．一方，浅羽地区南東部の大囲堤の堤外に位置する大野地区と中新田地区（図１）では，海に沿って低平地が広がっているため，高潮や河川洪水対策として周辺住民が自ら，微高地の自然地形に盛土を施し，高台を造成することで，そこを避難場所として利用した．こうした盛土施設を住民は「ツキヤマ（築山）」または「ツカヤ（塚屋）」という名称で呼んでいた．このように海岸防災施設は浅羽地区を含め，地区ごとに呼び方が異なり，ヤマ（山），タカ（高）等とも呼ばれ，住民間ではなくてはならない海岸防災施設となっていた（表２）．しかしながら，これらのほとんどは，私有地内に造成したものや，微高地を自分の敷地に取り込んで私有化されたものであったため，必ずしも公共性を有していたとは言い難い．

（３）「命山」の誕生—浅羽地区とその周辺には上記のような海岸防災施設を有していたものの，1680（延宝８）年８月６日に，江戸時代最大といわれる台風が中国地方から東北地方に至るまで来襲した．この影響で浅羽，横須賀両地区では約 1.5m の高潮に見舞われ，これにより浅羽大囲堤，ツキヤマともに大損壊を受けた[2]．そこで，本多利長の命により浅羽大囲堤の修復ならびに新しいツキヤマの造成が行われる．この時，本多利長は，公共的で大人数の住民が避難できる施設を建設するように地区住民に命じた結果，現在も存在している「大野命山（3.5m）」と「中新田命山（５m）」が誕

１：日大理工・学部・交通　２：日大理工・教員・まち　３：日大理工・院・不動産

生した．これらはそれぞれの集落の中心に配置し，誰もが利用できるように設えたことから，この時期になって公共的な盛土施設が形成されたといえる[5]．

以上の，大野・中新田の２地区は，浅羽地区外縁部のいわゆる「新規開拓された耕地」であり，遠州灘と河川に囲まれた水害危険地域であった．こうした新興地ながらも「命山」の造成が命ぜられたのは，年貢の取れる低平地であったことから，その地の住民を守るためであると考えられる．

４．参考文献

［１］浅羽町史編さん委員会:「浅羽町史民俗編」，浅羽町，付録，1998
［２］浅羽町史編さん委員会:「浅羽町史通史編」，浅羽町，pp.457-460，2000
［３］静岡県 HP http://www.pref.shizuoka.jp/sangyou/sa-760/denenkuukan/search/asaba/a05.html（閲覧日：2014. 9.26）
［４］静岡県袋井市歴史文化館:「遠州灘の高潮災害と二つの築山，pp.7-8，2013
［５］静岡県文化財団：「千年に一度の大地震・大津波に備える～古文書・伝承に読む先人の教え」，pp.170-171，2012
［６］静岡県考古学会 2012 年度シンポジウム実行委員会：考古学からみた静岡の自然災害と復興：静岡県考古学会 2012 年度シンポジウム，p24，2013

表２　浅羽地区の「命山」等の地区別の呼称と特徴

［凡例］◎印:ヒアリングおよび文献，○印:文献のみ，●印:ヒアリングのみ

呼称	特徴			地区名						
	概要	所有形態	工法	大野	中新田	太郎助	東同笠	松原	初越	湊
命山	築山を個人ではなく共同で築いたのが，同市大野や中新田にある命山である[5]．	共有	人工	○	○		○			
命塚	命山の別称[5]	共有	人工	○	○		○			
助ケ山(助け山)	命山の別称[5]	共有	人工		○					
ツカヤ(塚屋)	自然地形としてあった小高い砂山を取り入れて屋敷を構え，その上に地の神を祀った[1]．	個人	自然	○	○	○	◎			
築山(ツキヤマ)	村全体の住民が避難するほどの大きさはなく，個人宅(一門の本家の可能性が高い)に築かれたと想定されている[6]．	個人＆共有	人工	◎	◎	●	○	●	●	●
タカ(高)	湊地区ではタカと呼ばれている砂丘は，人工的に造られたものである[1]．	共有	人工							○
ヤマ(山)	ヤマは，浜砂が風や海流によって吹き寄せられてできた自然地形だといわれている[1]．	共有	自然					○	○	

図１　浅羽地区における「命山」をはじめとする海岸防災施設の分布状況と地理状況